

# 定年時代

なるのだという。「人間は生まれたときから徐々に体内の水分の割合が減少し、最期は『枯れ死』する生物。でも現代医療は、善意で点滴の管だらけにして無理に延命することで、患者を『溺死』させてしまうのです」

また、平穀死はよく話題に挙がる「安楽死」とは違うと強調する。

平穀死は、死への苦痛を麻酔や医療麻薬などで和らげる「緩和ケア」、遺族の心に寄り添う「グリーフケア」など、法的にも技術的にも実現可能な医療。だが、死期を人為的に早

「痛くない死に方」

在宅医療に従事する河田仁は、末期の肺がん患者・井上敏夫を担当。敏夫の娘の智美の意向で、痛みを伴いながらも延命治療を続ける病院ではなく、「痛くない在宅医」を選択したこと。しかし、河田は電話での対応に終始。結局、敏夫は苦しみ続けてそのまま死んでしまい、「自分が殺したのだ」と智美は自らを責める。河田は悔恨の念にさいなまれ、在宅医の先輩である長野に相談。在宅医としてあるべき姿を模索していく。

監督・脚本：高橋伴明、出演：柄本佑、坂井真紀、余貴美子、長尾和宏、大谷直子、宇崎竜童、奥田瑛二ほか。112分。日本映画。

シネスイッチ銀座(03-3561-0707)ほかで公開中。



©「痛くない死に方」製作委員会

命回にいな市神出。? と  
らの地獄の中で診療した。同年、尼崎で独立して外来診療をしながら、在宅医療に従事。以降同地から現代医療に一石を投じ続けている。

長尾さんが映画を監修するにあたり、こだわったことの一つが「死の壁」の描写だ。人は死ぬ直前、命の炎を燃やすがごとく猛烈に暑がりはじめ、服を脱ぎ、病状によっては苦痛にのたうつのだという。「多くのみどりを経験して得た私の知見です。ここで多くの家族は救急車を呼んでします。入院となれば医者は点滴につなげたがり、家族も同意してしまう」。だが一度延命治療に入つて、途中でやめれば医者が殺人罪に問われかねず、後戻りはできない。「そのとき緩和ケアで患者の苦

(2)

# 映画でも「死の壁」描写 （1面から続く）

真利（みゆり）に感  
あがね」

けたかったのです」  
医大では無医村を  
り、卒業後は救急医  
として大変に忙。そ

勤し、野戰病院さながらの地獄の中で診療した。同年、尼崎で独立

**ASA (朝日新聞販売所)は高齢社会を応援します**

朝日新聞サービスアンカー

# 死 穏 平



映画「痛くない死に方」公開中

人生100年時代の現代日本は、「多死社会」を迎えるようとしている。そんな中、延命のみにこだわる終末期医療の在り方に疑義を呈し、苦痛の少ない自然で安らかな死「平穏死(尊厳死)」を掲げ、最期を自宅でみとむ在宅医療の旗振り役として精力的に活躍しているのが、兵庫県尼崎市でクリニックを経営する「町医者」長尾和宏さん(62)だ。現在、長尾さんの著書を原作とした映画「痛くない死に方」が公開されている。「高橋伴明監督の脚本と役者たちの熱演で素晴らしい映画ができました。深い映画です。もやもや感が残るところもあると思いますが、皆さんには平穏死や在宅医療について考えるきっかけにしてほしいですね」(近田)

原作・医療監修の「町医者」  
長尾 和宏さん

映画は数ある長尾さんの著書のうちから、平穏死を解説した映画と同名の「痛くない死に方」と、在宅医療の理想と現実を赤裸々につづった「痛くない死に方」（ともにフュイクション）、「痛い在宅医」を原作としている（ともにブックマン社刊）。そのうち「痛くない死に方」は一般向けのやさしい医療解説書でストーリー性はほぼ皆無。だが、映画では両著をつなぎ合わせる形で見事にドラマ化されている。

著作の映画化は初めてであり、「感無量！」とほほ笑む。「できれば医療関係者を見てほしいです。平穏死はまだ、多くの同業者、特に病院のお医者さんに理解されているとは言い難い現実があります。映画を見た人で、大きな病院に通院中の人に、「先生、見ましたか?」と鑑賞をすすめていただけがうれしいですね(笑)」

長尾さんは勤務医・在宅医としてこれまで約2500人をみどってきたと話す。その経験から、人生の終末段階